

トピック

「環境」と「産業」の融合に向けた新たな取り組み

— 「苫東価値」の実現に向けて —

ふるい としろう
古井 俊郎

株式会社 苫東 企画営業部長

1. はじめに

国道235号線からはずれた小径を道なりに進むと、森林浴をしているかのように深い森が現れる。そして、さらに進むと一面が開け、広場スペースにつながる。ここは、平成19年に天皇・皇后両陛下をお迎えして開催された第19回全国植樹祭の会場となった（全国の工業団地で初めて）場所である。また、同時にここには苫小牧を代表する果実であるハスカップ畑や地元高校生（野球部）により植樹されたバットの材料であるアオダモの植樹会場などもある。

こうして書くとここが広大な産業基地の中であることを忘れてしまうが、ここは、国内最大級の工業団地である苫小牧東部地域（以下「苫東地域」という。）の中にある「つた森山林」（後述）なのである。

苫東地域は、工業団地の開発に当たり貴重な緑地空間を維持しつつ、産業用地の開発を行う、いわば「環境」と「産業」の両立を企図した画期的な工業団地としてスタートした。緑地空間と産業用地が全体計画のなかにゾーニングされ、バラ

ンス良く配置された。

事業主体である㈱苫東（本社：苫小牧市、資本金：62百万円）は、平成11年に発足後、国をはじめとした関係行政機関、金融機関等との緊密な連携の下、産業開発に取り組んできたが、スタートアップの最初の10年を経過し、現在は次の10年に向けて、この貴重な「環境」と本来の使命である「産業開発」との融合に向けたさらなる取り組みを開始している。そうした㈱苫東が目指している、新たな企業価値を本稿では「苫東価値」と表現する。

2. 全体計画の概要

苫東地域は、昭和45年にスタートした第3期北海道総合開発計画に基づいて計画された大規模プロジェクトである。昭和46年に基本計画が策定され、翌年に実施主体として苫小牧東部開発㈱（以下、旧会社）が設立された。当時の基本計画では、敷地面積11,250haのうち約3割を占める



（資料：いずれも当社HP）

3,400haを緑地等としており、山林原野の一角は、おおむね公園緑地としての利用に供するものとし、優れた自然環境を保存することが大きな特徴となっていた。当時、国内では、公害問題が顕在化しており、そのようななかで、苫東地域は公害のない緑豊かな工業基地として、新しい時代の理想的な工業開発を目指したが、その後の経済社会情勢の変化のなかで、大規模な基幹資源型産業等の立地が進まず、最終的に旧会社は清算され、事業は平成11年に設立された現在の(株)苫東に継承されているところである。

苫東地域は、苫小牧市中心部から東へ約10km、札幌市から南へ約60km、新千歳空港から約10kmの道央地域南部に位置し、苫小牧市、安平町、厚真町の1市2町にまたがる総面積10,700haに及ぶ広大な開発面積を有している。この内訳として産業用地は5,500ha、緑地は全体の3割程度に当たる3,200haとなっている。

3. 苫東価値の実現に向けて

苫東地域は東西9km、南北12kmに及ぶ広大なエリアであるが、ゆるやかな丘陵地と低地からなり、多種類の広葉樹・針葉樹が広く分布し、野鳥も200種以上が確認され、豊かな川の流れや多くの湖沼とあいまって多彩で美しい自然がある。こうしたロケーションを生かし、環境の時代と言われる今日において、この貴重な緑地空間をいかに苫東価値に結びつけていくか、「環境」と「産業」の融合をどう進めていくか、このようなことが当社の大きなテーマであると認識している。

昨年10月、生物多様性条約第10回締約国会議(COP10)が名古屋で開催されたのはまだ記憶に新しいところである。「生物多様性」という概念は、わかりやすくいえば「さまざまな生物が存在していること」と理解しているが、この生物多様性の議論は、地球環境問題の1つとして地球温暖化と並ぶ大きなテーマになりつつあると思われる。

企業社会においても、例えば「多様な生物に支えられ生態系サービスの恩恵を受けると同時に影響も(生態系に)与えている」(株)東芝ホームページ)と認識されており、生物多様性に配慮した

企業経営を行うことが企業の社会的な評価につながる時代が到来したとみることができる。

当社では、従来から緑地空間の維持・管理を行ってきているが、今後は生物多様性の保全という観点からも取り組みを進めていく必要があると考えている。現在当社がかかわっているさまざまな取り組みのうち、苫東価値の実現に向けて具体的に動き出している主なものを次のとおり紹介する。

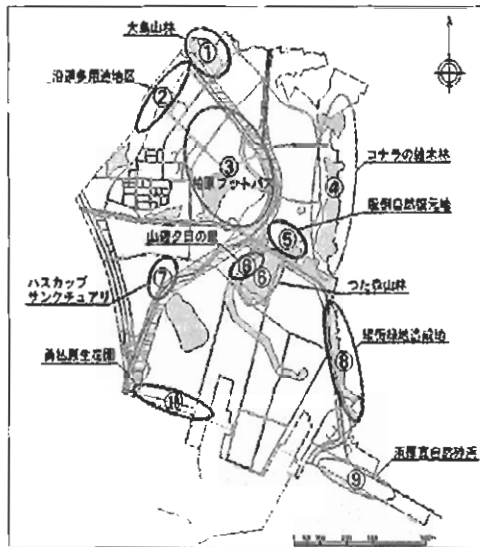
(1) 苫東環境コモنزの取り組み

冒頭の「つた森山林」は、苫東地域が有する貴重な緑地空間の1つであるが、ここは、もともと地元の森林組合長であった故 蔦森春明氏が所有していた「里山」的な森林であったものを、森林としての価値の継承を条件として用地買収させてもらった経緯があり、当社は現在もそれを貴重な財産として維持・管理してきている。こうした保全すべき緑地は、産業用地としての開発の予定はなく、今後も産業開発用地と別に全体計画のなかに位置付けられているものである。ただし、広大な自然を維持・管理していくことには当社のような小規模な会社では限界があり、どう維持・管理していくかが大きな経営課題でもあった。

そうしたなか、近年研究者・実務者等を中心として、苫東地域における「環境コモنز」という発想が生まれてきた。これは、苫東地域の豊かな緑地空間を「守りながら利用させてもらう」仕組みとして提案されたもので、NPOや市民が企業、行政とともに緑地空間の維持・保全とその活用を進めてみようという実験的な取り組みとも言える。

「苫東環境コモنز」はNPO組織であり、昨年1月に道知事よりNPO法人の認証を受けている。「苫東環境コモنز」の活動の特徴はNPOが森林を利活用したいと考える人びととの協働(利活用ビジョン(案)参照)によって、苫東地域のもつ豊かな自然資源、緑地空間をさらに付加価値の高いものとして、次代に継承していこうとする取り組みを行っていることである。苫東環境コモنزのホームページによれば、「明確な私的土地

環境コモンズによる利活用ビジョン(案)



ゾーン名	特徴
①大島山林	旧所有者の名前を冠した広葉樹林を主とした苫東の骨格的緑地。
②沿道多用途地区	国道 234 号に面した苫東最北部の一帯。
③柏原フットパス	湿原と採草地・雑木林のゾーン。道内トップクラスのフットパス適地。
④コナラの雑木林	1990 年から苫東が取り組んだ雑木林保育地。苫東環境コモンズの2番目の原型に相当。
⑤風倒自然復元地	1981 年の 15 号台風の風倒跡地約 40ha を造林せずに天然復旧。
⑥つた森山林 & 山辺夕日の里	苫東の緑地の拠点。林道はフットパスに。
⑦ハスカップ サンクチュアリ	湿原の自生地が乾燥化して生まれた群生地。
⑧縦衝緑地造成地	備蓄交付金による北海道の造成地。
⑨浜厚真自然砂浜	気宇壮大な自然海岸。
⑩勇払原生花園	海浜植物の原生花園苫小牧版。

(資料：苫東環境コモンズ HP、表は筆者が同 HP を加工)

所有の枠組みのなかで、かつ、所有者の許容する範囲内で、地域住民が「環境の享受(利用)」を行い、その引き替えに利用管理・情報発信の一部に協力する相互関係の仕組みを指す。つまり“土地の重層的な利用によって持続可能な環境を保全する”ことを目指す」とされている。

現在の「苫東環境コモンズ」の活動の中心は大島山林を主体とした市民参加型の森づくり活動である。今後は調査研究等も視野に入れており、より付加価値の高い緑地空間の利活用を目指した活動が検討されている。

(2) 苫東・和みの森運営協議会の取り組み

「苫東環境コモンズ」の取り組みがNPOを中心とした市民発意のボランティアな活動であるのに対して、「苫東・和みの森運営協議会」の活動は任意組織の活動であるものの、行政等関係機関と締結された協定書、いわば明文化された約束事に基づく市民のボランティアな活動である。

当社では、平成19年に開催された全国植樹祭を契機として、植樹祭跡地と周辺の森林を地域住民、企業・団体等との協働により守り育て、未来の世代に継承していくとともに、そうした活動を通して地域と企業とのつながりや森林と人とのつながりなどを育んでいくために、北海道など関係機関との間で平成21年に協定を締結している。

そうした活動の中心となっているのが、この「苫東・和みの森運営協議会」という任意組織である。

協議会では勇払原野的里山の風景の復元を目的として、より多くの人や組織に活動の機会を提供し、里山復活に貢献してくれる場を創出するよう活動を展開しているところであるが、今年度は森づくり事業(里山の森林環境を増やしていくための植樹、草刈りなど)、ひとづくり事業(地域に住む幼児、児童、保護者向けの体験学習、セミナーなど)、業務推進事業(広報活動、ボランティアのコーディネートなど)を柱として活動している。

(3) 苫小牧CCSの取り組み

地球温暖化問題への対応は国内外を挙げての喫緊の課題であるが、CCS(Carbon dioxide Capture and Storage)はCO₂を早期かつ大規模に削減することができる切り札の1つとして、現在研究が進められているものである。

CCSとは工場や発電所で発生するCO₂を捕え、地中貯留に適した場所まで運び、地下約1,000mより深い貯留層(帯水層等)に圧入、貯留する技術であり、(日本CCS調査(株)ホームページ)、国では実証試験が計画されている。

苫小牧ではCO₂を地下に貯留するCCSの実証試験誘致を目指すために、苫小牧CCS促進協議会

「和みの森」基本構想ゾーニング計画



ゾーン名	特 徴
森の育て方体験ゾーン	全国植樹祭会場で造成された区画 基本的に保安林の事業として保育が進められる区画
集いの広場	全国植樹祭記念式典で使用 基本的に広場としてそのまま利用
森のコミセン中心ゾーン	活動の中心となるゾーン (活動拠点)
森の恵み体験ゾーン	比較的弱齢の広葉樹部分 立ち枯れた木が多く、林層もやや密に

(資料：和みの森運営協議会 HP、表は同 HP を筆者が加工)

(会長：岩倉博文 苦小牧市長、事務局：苦小牧市)
が昨年立ち上がったところであり、当社もメンバーの一員として活動している。

日本CCS調査(株) (本社東京、平成20年5月設立、電力会社等が出資) の報告によれば、苦小牧沖は石油・天然ガスの開発調査で地下深部の地質構造データが豊富なうえ、CO₂を安全に封じ込めるために適した貯留層と遮蔽層が確認されているとのことである。苦小牧は、国内の実証試験の有力な候補地の1つとされており、今後、国により実証試験の候補地が選定されるものと考えられる。

現在、苦小牧では経済産業省の委託調査として、日本CCS調査(株)による調査井の掘削工事が行われており、今後はその結果を報告することになっている。実証試験地に選定された場合には、事前調査した海底下の地層にCO₂を貯留するための施設建設に着手することになる。一方、CCSには課題もあり、安全性の確立が必要になってくる。

幸い苦小牧では事前調査や掘削工事も着実に実施されている状況にある。仮に苦小牧が選定された場合には、CO₂削減のための切り札を苦小牧がもつことになり、環境負荷の低減に積極的に取り組む企業やCO₂を利用する企業にとっては大きなインセンティブになるものと思われる。当社としてもCCSの活用による企業誘致やプロジェクト誘致に弾みがつくものと期待している。

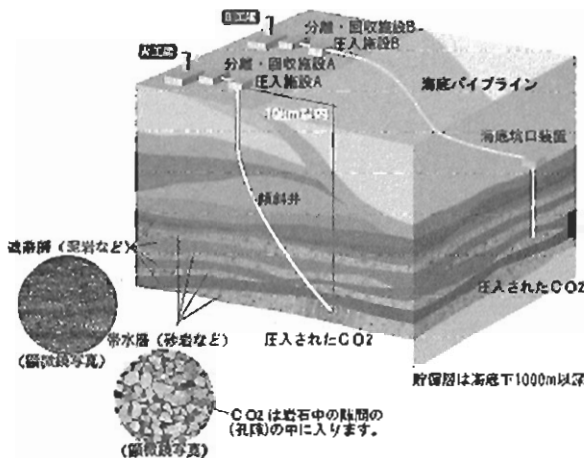
4. 結びにかえて

「環境」と「産業開発」の融合は、高度経済成長期に顕在化した公害問題あたりからのきわめて重要な政策課題であると同時に、企業サイドに立ってみれば重要な経営課題にもなっていると思われる。消費者の目線からみれば、「環境」に無配慮な企業はマーケットから淘汰されてもやむをえない、ということが当たり前の時代になってきている。

当社が目指す苦東価値は、「環境」に積極的に向かい合い、自らの企業価値・組織価値に生かしていこうとする企業・団体・組織等との連携があって初めて成り立つものと思われる。

今後は時間や距離の制約といったハンディを乗り越えてでも実現しなければならない企業価値・組織価値に多くの人びとが共感・共鳴してくれる時代が到来するものと確信しており、そうした価値観の延長線上に苦東価値があるものと思うところである。平成23年がそうした取り組みが評価される年になってほしいとの期待を込めて本稿を締めたい。

CCS 概念図



(資料：日本 CCS 調査(株) HP)